

安達生恒篇の開発・制作について

長谷川 利 彦

はじめに

安達生恒先生を「人物ライブラリー・学術の記録」のシリーズにとりあげることについては私自身、多少のためらいがあった。私自身がディレクターとして駆け出しの頃から始まった先生とのお付き合いはもうかれこれ、20年以上にもなって、先生の学者ぶらない飾らない人柄に親しみをもっていたが、果たして先生の学問的業績の評価はどうかという点になると、さっぱり見当がつかない。過疎問題での取組では、「島根大学に安達あり」という評価が、全国的にも高まっていたはずであるが、過疎という言葉も最近はめっきり聞かなくなったし、その後の先生の活動は、どんどん農村の現場に入って「有機農業運動」「近代化農政批判」と実践的な方面への志向を強められ、本業の農業経済学の理論的な面での貢献が、学会でどのように受け止められているのか分からなかったからである。

しかし、その一方、今までにないユニークな「学術の記録」になるのではないかという期待もあった。私なりに感じ取っている安達先生の学問の魅力をざっと、整理してみると

1-現場主義

欧米思想の輸入・紹介に頼ってきた日本の学問に対して、安達先生の学問は、文字通り、農民に学ぶ姿勢に貫かれている。大学という、現実と接触するに最も不適切な場所を離れ、「むら歩き」をして「農民に学ぶ」先生の学問の方法はフィールドワークが苦手な後学の士におおいに参考になるのではないか。

2-総合性

社会科学が扱う、人間社会の現象は多岐にわたり、個々の現象は複雑にからみあっている。特に、農村＝むら社会は政治、経済、社会、農林業の経営・技術、家族、など様々な学問の対象となる分野が複雑にからまっている。

現在の学問の世界に横行している専門主義では、「むら」の問題は解き明かせない。

真実に近づくためには、細分化され、断片化された各専門分野を総合させる作業が、必要となって来るが、安達先生の学問は「社会農学」の提唱にみられるようにある種の総合性を持っている。

3-人間主義

経済学といっても先生の農業経済学は、ものの背後に人間がどっかと腰を据えている。過疎問題も「器・うつわ」としてのむら社会の危機というよりも「中身＝ひと」人間の危機として捉える。

提案作成

安達先生の学問の特長＝魅力をふまえて、番組提案を作成した。安達先生が戦後、歩いてこられた「むら」-そこは戦後の日本の農村の歩みを象徴する様々な問題が山積している現場でもある-その現場を先生にもう一度訪ねてもらい、現場で農民と出会い、農民との語らいの中から、問題の所在を探り解決策を生み出してゆく、安達農学の真髄を見せるというのがこの提案の発想である。

人物ライブラリー『学術の記録』提案

長谷川利彦

タイトル むらの戦後史を歩く

出演者 安達生恒（島根大学名誉教授）

内容

安達生恒－1918年、新潟県小千谷市に生れる。京都大学農学部卒

現在、社会農学研究所主宰、過疎問題調査委員会、村落研究会委員『むらの再生』で中国文化賞受賞

『日本農業の選択』『農林生産力論』『農山村地域開発論』

全国の荒廃農地が22万ヘクタール－

東京ドームの4万7千個の農地が、いま、荒れ果てている。しかも、この5年間で荒廃農地は更に、60パーセントも増えようとしている。

戦後のむらの歴史とは、いったい、何だったんだろうか。

日本各地のむらを歩いて、農業とむら共同体の変化を見続けてきた、安達生恒さんはある時は、「蜜柑ブーム」の中で、生産拡大をして、過剰生産と農産物の自由化に悩む蜜柑産地を訪ね、農政の近代化を問直す。またある時は、10年間に40パーセントもの、激しい人口流出に見舞われた、中国山地を訪れ、老人だけが住みついてむら社会の機能が維持できなくなった、過疎のむらの人びとの暮らしを見つめる。

さらには、有機農業の新たな展開の中で、むらの伝統的価値観を越えて、都市の消費者との交流を計る、若者の姿の中に、新たなむら発展の可能性を探る。

戦後のむらの変遷を見続けてきた、一人の農学者の学問遍歴と、現実をオーバーラップさせ、学術の記録としたい。

安達農学の集大成を目指しての検討

安達先生が社会的に発言されたものは、学術論文の形式をとったもののほかに、農業関係の専門誌に載せられたもの、一般向けの著書と膨大なものになる。主なものを読みすすめる内に、先生の学問領域が、私どもの考えていた以上に幅広く奥深いことが分かった。例えば、戦前に中国の北京郊外で農村調査を行ない、中国農業の近代化に占める商業資本の役割を実証的に分析した「中国経済と商業資本」といった若き日の著作をどう戦後の先生の活動のなかに位置づけるのか。

多岐にわたる先生の業績を、一応5つに句切りを付けて考えたのが、以下のレジュメである。

安達生恒先生の学問体系 レジューメ

1-安達理論～社会農学の提唱～

徹底した現場主義、日本農業の伝統を尊重し、その中から近代化の方向を探る、ジャーナリスト的、学際的、アカデミズムになじまない、「農」の論理化

初期論文「日本農民のエコノミックメンタリティー」

2-農本主義論～京大人文学研究所、愛媛大時代～

論文「農本主義の再検討」(思想)

『『家の光』の戦後適応』(思想の科学)

「農民・横山仙太郎の生活と思想」

農本主義思想の鼓舞者たちと受け手である農民の双方に共通する伝統的発想法-郷土という共同体的思考法

日本農民のもつ思想の二律背反性

3-過疎論～島根大学時代～

高度成長のひずみ論を越えて「過疎化の内部メカニズム」の分析～戸数過疎住民意識の疎外、集落重視、老人

著者「むらと人間の崩壊」「過疎とはなにか」「農林業生産力論」

政策提言-「私家版過疎白書」～新過疎法の中に取り入れられている

4-地域開発論

農業近代化論の否定、資本合理より社会合理へ、住民自主組織としての集落の改造、土地利用計画

著者「むらの再生～土地所有の社会化」「農林業生産力論」

5-市場経済論

初期著書「商業資本と中国経済」

「飽食の中の食糧危機」-資本により生産と消費者の分断

「産直」有機農業のたべもの論

「農協大改革案」「日本農業の選択」

レジューメ作成の過程の中で、農産物の自由化、有機農業、過疎、地球環境といった、アクチュアルな問題にかかわってきた安達先生の学問が、実は農本主義の研究や、戦前の中国市場経済の分析といった、日本の農学の長い伝統の上に立って、そういう深みの中から現在の安達農学というものが生まれてきていることが実感された。

安達農学の部分を切り取って、その時々時代のテーマにあった先生の意見を番組化するというのは、NHKを始め、多くのマスコミでの取り上げ方である。

少なくとも、「学術の記録」と銘うつなら、安達農学の全貌を視野に入れたものにしたい。安達先生の業績を説得力をもって語るには、従来の「人物ライブラリー・学術の記録」のような、単発主義の、一本読み切りでは不可能なのではないかという疑問がわいてきた。

シリーズの構成

安達先生の業績の大部分を網羅し、なおかつ今後の作業日程とも兼ねあわせて、一部二部の2本立てでまとめられないかと考えて作ったのが以下の構成である。

人物ライブラリー『安達生恒』構成1

安達農学～日本農業の伝統を尊重し、その中から、近代化の方向を探る。

「ひと」と「しくみ」の2つの側面から「農」の論理化をめざす。

第1部 「ひと」編

1-農民論

初期論文「伝統農民のエコノミックメンタリティー」

「農民・横山仙太郎」

著書『むらの戦後史』

2-農本主義論

初期論文「農本主義の再検討」「家の光の戦後適応」

3-むらの知恵の発見

著書『むらの再生～土地利用の社会化～』

4-「農」を捨てた近代農法批判

著書『日本農業の選択』

5-新農本主義へ

執筆中『我農生・山崎延吉伝』

著書『今、農業第三世代が面白い』

第2部 「しくみ」編

1-個別農業経営論

複合経営、専作大規模の近代農法批判

2-過疎論

資本がむらを壊す-リゾート資本の土地買占め、自然破壊

むら人がおかしくなる

老人問題

3-地域開発論

「産直」、有機農業、市民と農民との提携による地域振興、農協改革

4-日本的生態系循環モデルの追求

河川を軸にした、岳、岱、丘、平地、海の生態系循環をそこに生活し生業を営む人々の暮らしの中に探る

安達農学の中身を「ひと」と「しくみ」の2つのキー・ワードで整理してみた。

「ひと」とは、この場合、農民であり、農民の生き方メンタリティーである。それはまた農業の

生産力を見えない所で支えている農民の知恵である。後に日本型のファシズムの源と喧伝され、戦後の民主化の時代風潮の中ですこぶる評判のよくない「農業主義」思想は今日どのように位置づけられるべきなのか。農業問題の主体となる、日本農民の意識の問題に安達先生はどう取り組まれたのか。今日の農業危機のなかで、なお農村の明日をになう農民像はどこに求められ、どのような意識形成がおこなわれる必要があるのか。

「日本農業の直面している問題に、なんらかの政策的発言をおこない、もしくは実践的解決を意図する場合、農民の実生活における動きを規制しているメンタリティーに正しい認識を持つことは心要不可欠である。」（「伝統農民のエコノミック・メンタリティー」）農業経済学者の中で、早くから、農民の意識の問題に着目された先生の農民論を中心に、第一部「ひと」編を構成する。その際、若き日の安達先生が、初めて本格的に日本の農民と向き合い安達農学が誕生する舞台となった、愛媛県の南予地方を先生に訪ねてもらい、先生と農民との再会をドキュメントして、農村の現場で農民との語らいの中から問題の所在を探り、解決策を生み出してゆくという安達先生独自の学問的な方法論も視聴者に分かってもらうように構成するという方針を立てた。

第2部の「しくみ」編では、過疎など地域社会におこったヒズミの問題、有機農業による産直運動と既成の市場流通のあつれきの問題、「近代」農業が破壊した自然生態系の保全の問題等々-むら、農協、市場、農政など農民を取り巻く様々な「しくみ」が、どのように農民と向き合い、解決をせまられているか、その道筋を明らかにすることを狙いとした。

こうした大枠のデザインを描くことができたので、個々の構成やロケ・コンテは比較的容易に仕上がり、撮影に臨むことができた。

ロケ・日程と構成

ロケは1992年10月に東北方面、12月に四国・中国方面と2回に分けて行なった。

第一回目のロケは、10月14日から18日までの間で、山形県高畠町の「米沢郷牧場」秋田県藤里町の白神山地の岳岱風景林、サフォーク牧場などで行なった。

1-「米沢郷牧場」は273戸の農家が法人組織を作り有機農産物の共同生産・出荷をおこなっているところ。環境問題への関心が高まっているが、従来のエネルギー浪費型の「近代農業」に代わる「持続可能な農業」とはなにか。その答えを農民の実践の中を探るために、先生は米沢郷牧場を訪れる。米や野菜、果物を化学肥料や農薬を使わないで作るためには、大量の有機質肥料が必要となるが、ここでは牛、鶏が飼われ、そのフンにモミガラや米糠、ビール粕を混ぜ、微生物を加え発酵させ堆肥を作っている。エネルギー浪費型農業を持続可能な農業に変えるには、このような有機農業の、地域システムづくり、多数の農家がそれに参加できるような「しくみ」を作らないと日本の農業は変わらないとする先生の長年の主張が実例をもって展開される。

2-秋田県藤里町（白神山地）は先生が現時点で、もっとも精力的に追求している「農業と環境問題」というテーマの解決を探るにふさわしい具体的素材を提供するところという視点から選んだ。

白神山地から日本海までおよそ40キロの能代川水系には、日本のとくに東北地方を代表する自然生態系が比較的よく残されている。

人物ライブラリー『安達生恒』ロケスケジュール (10/14～10/18)

日	午 前	午 後	宿泊先
14(水)	9時 東京	2時 稲刈り、天日乾燥 米沢 農産倉庫、免許証	
15(木)	産直活動 (トラック出発、直販) 菌体飼料の生産 事務所内部、ミーティング	対談・牧場 安達・伊藤 4時～6時 赤湯～仙台 赤湯～山形	
16(金)	<ヘリコ取材組> 仙台～秋田～能代川流域、白神山地～秋田～二ッ井 <地上取材組> 山形～秋田～藤里町 樺 東京～秋田～二ッ井 山	サフォーク牧場・マイタケ	藤駒荘 0185-79-2710
17(土)	対談・岳岱風景林 安達先生・樺山先生	ふるさと自然公園 素波里ダム、休憩所、 サフォークの館 稲刈り脱穀風景	
18(日)	移動		

環境問題がとりざたされ、それとの関連で山林、林業、農法、川や海の水質汚染等が問題となっているが、山は山、川は川、海は海とただそれだけで単独に取り上げられ、そして、「ひと」は農民、漁民、山持ち、地域住民と皆ばらばらに取り上げられている現状に、安達先生はかねてから、不満があったという。これでは「環境」問題はわからないのではないか。幸い能代川水系には、山-林業、丘-畑作、平地-稲作、川-内水面漁業、海-漁業という風に、一つの河川を軸にして、日本的生態系の循環が、そこに生活する人とともにのこされている。これをいかにして守るのか。

「流域」の生態系がだれによってなにが原因で乱されるのかそれを明らかにしなければ環境問題の答えにはならない、それが先生の考えであった。

時はあたかも、「世界遺産条約」で白神山地のブナの原生林が、屋久島とともに後世に残すべき自然遺産としてクローズ・アップされているところであった。

この際、白神山地の魅力を、黄葉するブナの原生林とともにたっぷり見せ、さらには安達先生のいう日本型生態系の地形を、空から見ようということで、ヘリコ取材を試みることになった。

さらに、樺山先生との対談では「自然保護と農林業のあり方」をとっくりと語ってもらうにふさわしいバックとなるブナの原生林を求めて、藤里町の中心からおおよそ、20キロにある「岳岱風景林」というところまで、一部は徒歩で上った。役場の方には重さ15キロ程もある、電源用のバッテリーを肩に担いで上がってもらうというおおがかりなロケとなった。

当日の天気は快晴。斜めからの朝の光りがブナの葉を通して対談する2人の先生を包み、微風にかすかに揺れるブナの葉と落葉の音。申し分のない景色をバックに、20分の対談はノーカットで、一気に収録された。

人物ライブラリー『安達生恒』第2回ロケスケジュール (12/9～12/15)

日・曜	午 前	午 後	宿泊先
9(水)	東京発	岡山着	
10(木)	岡山発 松山着 11:30	発 明浜着 ロケ 12:30 15:00 (みかん収穫作業、事務所)	民宿ふるさと (0894) 64-1616
11(金)	町紹介用V・安達先生説明 (イリコ、真珠、町並)	みかん出荷 客神社へ 海に見える畑 同窓会	民宿ふるさと
12(土)	対談収録 車窓収録 八幡浜	松山 広島 弥栄 (ロケ・共同体食事)	弥栄研修道場 (0855) 48-2612
13(日)	対談収録、 程原・横谷 過疎老人インタ 弥栄大ロング	共同体作業 大根、家畜 みそ加工 松江	
14(月)	安達先生宅ロケ 書斎・写真 松江発	岡山着	
15(火)	岡山発	東京着	

第2回目のロケは12月9日から15日までの6日間で行なわれた。愛媛県の宇和島に近い、明浜町で最初のロケを行ない、松山を通過、瀬戸内海をフェリーで対岸の広島にわたり、中国山地を横断して、島根県弥栄村で過疎地の対談収録、そして現在の安達先生の住いとなっている松江市で先生の書斎ロケと、四国中国地方を縦断する大掛かりな、しかも、時間に余裕のない密度の濃いロケ日程となった。

今回のロケ構成は以下の通りである。

人物ライブラリー『安達生恒』第1部・ひと編 ロケ構成 (12/9～12/15)

NO	項 目	映 像	内 容	時間
1	タイトル	みかん山合い走る予讃線	TM	1
2	イントロ	車窓の二人 (安達・樺山) 対話する二人	愛媛県明浜を訪ねる 番組の狙い	4/5
3	安達先生の横顔	先生の自宅・書斎 ワープロで執筆中、写真	先生の経歴、業績 現在も旺盛な著作活動	4/9
4	明浜町紹介	みかんと漁業の町ロング 町並中歩く二人 (イリコ、真珠、段畑)	町を説明する安達先生 (暮らしの歴史と特色)	6/15

5	安達農学の誕生	思い出に残る人人の集い 昔話に花が咲く雰囲気 幸地久志、宇都宮利治 川井又一郎 高岡ミエ子 写真「青年団と安達」	若き安達先生と青年達との出会い 戦後復興期の青春 復興、民主化へ情熱 青年団、農村青壮年会議 の活動、「村の封建制」と 女たちの戦い	15/30
6	対談－1	みかん山での二人 「伝統農民のE・メンタリ ター」「農本主義」 「農民・横山仙太郎の生活 と思想」 「オーバインのむら」	安達先生が明浜で抱んだ もの 既成の農業理論、むら 理論の反省 風土と生活のなかから農 業問題を見る観点 主体的に行動する農民 農村の潜在的過剰人口の 問題	10/40
7	その後の明浜	村の人人の語らい続く 幸地、中村久藤 片山元治	漁業異変、イワシが獲れ ない、イリコ、真珠 みかんブーム 大早魃と価格暴落	5/45
8	対談－2	みかん山での二人	自給農業から商品生産 みかんブームの落とし 穴、インフレに隠れた過 剰投資	5/50
9	明浜の新しい波	村の人人の語らい 幸地、中村、宇都宮 片山元治、高岡永治	みかん農家・新旧対立 かつてのイモ見直し	5/55
10	「無茶茶園」登場	事務所働く若者、パソコ ン伝票、みかん集荷、マー マレード加工場、みかん 収穫、片山インタビュー	全国的な動きに呼应し有 機農業のグループ そのシステムと規模 「全町農業革命」	5/60
11	対談－3	海に見える丘の二人	「ひと」編のまとめ 安達農学の今日的意義 現場重視の学問 学問の有効性とは？ 輸入学問と	16/76
12	エピローグ	村の祠に向かう人、祝詞 祝杯、安達先生の喜び顔 祝福する村人達 語らい 続くロング－海	安達先生の村への貢献に 報いて、「客人」として合 祀の企画が、農民と共に 歩んだ安達学	3/79
13	エンドタイトル	みかん山風景	TM	80

第二部の「しくみ」編の構成の内、島根県弥栄村、松江市の部分の構成は以下の通である。

人物ライブラリー『安達生恒』第2部 しくみ編 構成・ロケコンテ

NO	項 目	映 像	内 容	時間
1	タイトル	中国山地の山並み 集落、老人	TM	1
2	イントロ (過疎問題)	<白黒フィルム> S38年の豪雪、雪 に埋もれる集落 雪と戦う村の人人 廃屋、荒れた部屋 村を去る人	日本全体が高度経済成長の夢に酔 い痴れる時、村は未曾有の激しい 人口の流出に見舞われた。 崩れ行く集落。挙家離村。過疎と いう問題に、いちはやく立ち向 かったのが安達先生である。	3/4
3	いま、過疎地に 立つ	弥栄村大ロング	当時、全国一の人口減少率	1/5
4	過疎調査地再訪	程原集落ロング 訪ねる二人 荒廃した田畑 対談－1	三つの集落の入って聞き取り調 査、最も過疎の激しかったのが程 原集落 その時、見たものは？	4/9
		P－1 過疎化の内部メカ P－2 過疎集落の老齢化	過疎化の構造－容物自体縮小 過疎の中の過密、住民意識の後 退 西日本型と東北型、段階論 20年先行する老人社会化	8/17
		独居老人に会う 老人インタ	<同録>やりとり 「 」	
5	過疎対策へ提言	対談－2 私家版過疎白書 P－3 過疎対策への提言	過疎法（45年）の意義と限界 ものの整備が中心で住民不参加 新過疎法へ七つの提言 六つは採用された	5/22
6	過疎地再生の道	横田集落研修農場 建設中の家 弥栄郷共同体 大家族の食事 大根収穫 家畜の餌やり みそ加工 代表インタビュー	過疎地をよみがえらすには？ 地域の中に答えがある 村の公共投資、様々な施策 都会を脱出した青年たち 70年代に全国的な傾向 こうした青年たちが過疎地再生の 鍵を握る。共同体の歩み 「村に溶け込む努力、生活の面での 共同と、生産法人化」 村はこうした異邦人を取り込み新 たな活力を持つ	8/30
7	むら再生の論理	対談－3	土地利用の社会化 農民にとっての土地とは？	

		P-4 土地、労働交換図	土地観の狂いをもたらしたもの 労働力と土地の交換 21世紀への課題として考える 大分、宮崎の例 日本型デカブリングは可能	10/40
--	--	-----------------	--	-------

編集

現地ロケを無事に終え新年から編集作業にとり掛かった。編集の前に、もう一度、撮影された全ての映像（ラッシュ）を見直し編集計画をたてたところ、第二部「しくみ」編にあたるところの分量がとて多く、どう見ても一本では納まり切れないことが分かった。とくに、環境問題と農林業の関わりのテーマは、これからの大事な問題で、21世紀に向けて、日本の農業・農民が如何に生きてゆくべきかが問われている問題なので、もう一つ新しく章を立てて論ずべきことが分かった。

そのため、最終的には今回の『人物ライブラリー・学術の記録・安達生恒編』は全部で3部構成となり一本読み切りでまとめられていた今までとは違う、異例の大作となった。その標題と内容は以下の通りである。

- 第1部『むらの戦後史を訪ねる』-安達農学の誕生、「近代化」の農政批判、農本主義
 第2部『むら・崩壊から再生へ』-過疎論、地域開発論、土地利用の社会化、生態系
 第3部『生態系に優しい農林業を』-生態系と農林業、JA 批判、農民層分解と新しい農民像、
 安達農学の方法

インタビュー

3本ともすべて、樺山紘一教授にお願いした。樺山先生は西洋中世史が専門で、農業経済学は直接ご専門ではないが、京都大学人文科学研究所に助手として在籍されていた折り、過疎や日本農村の問題に関わっておられたということで、安達先生のテーマについても、深い造詣をお持ちであること。そしてなによりも、ヨーロッパの歴史学者として、日本の農業をとりまく様々な問題に対して、安達先生とはまた別の角度から問題を投げ掛けて頂けば、新鮮な対話がそこに生れるのではないかという期待が持てることなどからである。収録を終えたあと安達先生は「樺山先生とは初めての対談だったがとても呼吸があった。私の仕事の粗筋を引き出す手腕には敬服した。樺山さんには随分助けられた。しかも、農業プロパーではなく西洋史の先生がよく引き出してくれて、たいしたもので敬服しました。」と語っている。

放送には何度も出演の経験豊かな両先生には、事前に用意しておいて構成表をお渡しして番組全体の流れを理解していただければ後は、話の展開は全くなのお任せて少しの心配もない。しかも時間まで、当初の予定と1分の狂いもなく対談はスムーズに進行し収録された。